

ロッシーニ《教皇ピウス9世を讃えるカンタータ》作品解説 水谷 彰良

初出は『ロッシーニアーナ』第21号(2001年)所収の拙稿『ロッシーニ全作品事典(16) 第II部門:劇音楽とカンタータより4作品』。図版を加えた改訂稿を決定版としてHPに掲載します。(2012年1月改訂)

題名 《教皇ピウス9世を讃えるカンタータ (Cantata in onore del Sommo Pontefice Pio Nono)》

作曲 1846年(9月末~10月25日以前*)、ボローニャ

註:10月25日付のジュゼッペ・スパダ宛書簡から、この時点で総譜が完成済みと判る。ロッシーニが行なったのは、レチタティーヴォの作曲、転用楽曲の改訂と声楽部の書き替えのみ(解説参照)。

作詞 ジョヴァンニ・マルケッティ (Giovanni Marchetti,1790-1852) イタリア語

初演 1847年1月1日(金曜日)ローマ、カンピドリーオの丘の元老院会堂(Aula massima del palazzo senatorio sul Campidoglio)

人物 ①万人の愛 [アモール・プブブリコ] L'Amor Pubblico (テノール)

②希望 [ラ・スペランツァ] La Speranza (ソプラノ)

③キリスト者の精神 [イル・ジェーニオ・クリスティアーノ] Il Genio cristiano (バス)

他に、男女の合唱首唱歌手 [コリフェーオ/コリフェーア Corifeo/a]

註:N.3に女性合唱首唱歌手(ソプラノ)2名のユニゾン、N.5に女性合唱首唱歌手(メゾソプラノまたはコントラルト)1名、他にも男性合唱首唱歌手(テノールまたはバリトン)1名を必要とする。

初演者 ①ピエートロ・カルダーニ (Pietro Caldani,?-?)

②ルイージャ・フィネッティ (Luigia Finetti,?-?)

③ベネデット・ラウラ (Benedetto Laura,?-?)

他にフォルトゥナート・シルヴェストリ (Fortunato Silvestri,?-?) [男性合唱首唱歌手]

編成 独唱(ソプラノ、テノール、バス各1、女性合唱首唱歌手2、男性合唱首唱歌手1)、合唱(ソプラノI・II、テノールI・II、バス)、管弦楽(2フルート/ピッコロ、2オーボエ、2クラリネット、2ファゴット、4ホルン、2トランペット、3トロンボーン、セルペントーン、ティンパニ、大太鼓、シンバルとトライアングル、弦楽合奏)、舞台上のバンダ(ピッコロ、クアルティーン [小クラリネット]、クラリネット4、ファゴット2、ホルン2、トランペット4、トロンボーン3、セルペントーン、大太鼓)

構成 (全集版による)

N.1 シンフォニアと導入曲 (Sinfonia e Introduzione) 〈知られざるなんという声が Qual voce d'incognito〉(赦免された人々の合唱)

註:シンフォニアは独立せず、導入曲と一体になっている。

— 導入曲の合唱後のレチタティーヴォ 〈おお、かくも長きに渡り涙した人々よ Oh sì gran tempo lacrimata schiera〉(万人の愛)

N.2 万人の愛のカヴァティーナ 〈彼の声力強い声が La sua possente voce〉(万人の愛、赦免された人々の合唱)

— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ 〈ことの初めから Quai da sì buon principio〉(希望、万人の愛)

N.3 少女たちの合唱 〈影をはらう太陽に Al Sol, che sgombra〉(二人の女性合唱首唱歌手、少女たちの合唱)

— 合唱の後のレチタティーヴォ 〈善とはなにかを知らぬ Non sa che sia bontade〉(希望、万人の愛、男性合唱首唱歌手、キリスト者の精神)

N.4 合唱付きの四重唱 〈聖なる頂よ、かつて誇りとせしは Sacra Cima, un dì superba〉(希望、万人の愛、男性合唱首唱歌手、キリスト者の精神、民衆の合唱)

— 四重唱の後のレチタティーヴォ 〈ああ、愛のため、私の情熱を燃やすその愛のため Ah sì, d'amor, di quell'amor ond'ardo〉(キリスト者の精神)

N.5 フィナーレ 〈神意の船の上で Sul provido Naviglio〉(希望、女性合唱首唱歌手、万人の愛、男性合唱首唱歌手、キリスト者の精神、民衆の合唱)

演奏時間 約46分

自筆楽譜 ペーザロ、ロッシーニ財団(新たに書かれた声楽パート)及びナポリ、セルジョ・ラーニ個人コレクション(ロッシーニ自筆の書き込みのある筆写譜)。なお、全曲の完全な自筆楽譜や写譜は存在しない。

初版楽譜 次の全集版

全集版 II/6 (Mauro Bucarelli 校訂) Fondazione Rossini, Pesaro, 1996.

解説

1846年6月16日、新教皇にピウス〔イタリア語読みではピーオ〕9世（Pio IX〔本名ジョヴァンニ・マリーア・マスタイ・フェッレッチェイ Giovanni Maria Mastai Ferretti〕,1792-1878。在位 1846-1878）が選出された。穏健改革派の支持を受けて教会国家の改革に着手したピウス9世が7月16日に政治犯の大赦をもって治世を始めると、民衆は「覚醒した教皇」と歓迎し、イタリア全土で教皇を支持するデモンストレーションを連日繰り広げた。その熱狂はボローニャに波及し、ロッシーニは友人たちの求めに応じて合唱曲《ピウス9世の父なる寛容に感謝する歓喜の叫び（*Grido di esultazione riconoscente alla paterna clemenza di Pio IX*）》（別稿の作品解説参照）を自身の指揮で初演、熱狂的成功を収めた¹。奇しくもこの合唱曲が初演されたその日、ローマの知識人ジュゼッペ・スパーダ（Giuseppe Spada,1796-1867）は、ピウス9世を讃えるカンタータの作曲を依頼する書簡をロッシーニに書き送った（7月23日付）²。だが、ロッシーニは返書の中で、意味深長にこう答えた——「カンタータを一つ作曲せよとのことですが、わが友人の閣下、私が1828年に筆を折り、それを再び執るのが不可能な状況にあるということ、貴殿も知らぬわけではありませんまい。私が元気だった頃にこの素晴らしい機会が与えられていれば、大喜びでそれを抱き締めたでしょうに。いまや私は不能者で、音楽的に無音の状態でいなければならないのです。もしもマルケッティが合唱曲に決めたなら、私はすぐにそれをお送りします」（ジュゼッペ・スパーダ宛、1846年8月6日付）³。



新教皇の誕生を報じる『絵入りロンドン新聞』

（1846年7月11日号。筆者所蔵）

ロッシーニはボローニャで演奏した《教皇ピウス9世に感謝する歓喜の叫び》の提供で済ませたかったが、スパーダの依頼が「ローマのロスチャイルド」といわれる大富豪トルローニア家の意を受けたもので、同家にふさわしい大規模な形式を再度強く求めたことから、旧作のオペラの楽曲を再使用することでこれに同意した。

カンタータの作詞者、前記の手紙で名前の挙がったジョヴァンニ・マルケッティ（Giovanni Marchetti,1790-1852）はロッシーニと旧知の伯爵・詩人で⁴、ピウス9世と同郷で青年時代からの友人でもあった。マルケッティはカンタータ冒頭に赦された罪人の感謝の合唱を置いてピウス9世による政治犯の大赦になぞらえ、その偉業を讃えつつ新教皇を「父」「統治者」とする新教皇主義（neo-guelfa）、すなわち教皇の主導で民族統一をはかる自由主義的カトリック穏健派の思想を鮮明にしている（Pioの名も、テキスト中に4回使われる）。全集版の校訂者マウロ・ブカレリ（Mauro Bucarelli）は、この作品の人物「万人の愛（アモール・プブリコ）」「希望（ラ・スペランツァ）」「キリスト者の精神（イル・ジェーニオ・クリスティアーノ）」もまた新教皇主義思想の基本的なコンセプトの一つを隠喩の形で表明するもの、としている⁵。

楽曲は五つのナンバーとそれを繋ぐレチタティーヴォ・アッコンパニャートから成り、ロッシーニはテキストに沿って旧作から楽曲を選び、詩に合わせて声楽パートを新たに書き直し、ナンバー間のレチタティーヴォのみを新たに作曲した。管弦楽のパートは、ロッシーニが指定したコピスタ（筆写者）のディアマンティ（Diamanti フルネームと生没年不詳）が原曲の管弦楽パートを転写する形で成立している。原曲とロッシーニが行った主な変更は、次のとおり。

ナンバーと楽曲	原曲と主な変更内容
N.1 シンフォニアと導入曲	《リッチャルドとゾライデ》(1818年)のシンフォニアと N.1 導入曲(Cinto di nuovi allori) (ロッシーニはテキストに合わせて歌唱パートを書き、管弦楽パートは筆写者ディアマンティが原曲から転写)
導入曲の合唱後のレチタティーヴォ	(ロッシーニが新たに作曲)
N.2 万人の愛のカヴァティーナ	《リッチャルドとゾライデ》N.2 アゴランテのカヴァティーナ(Minacci pur) (ロッシーニは歌唱パートをカンタータのアマチュア歌手用に易しくアレンジし、管弦楽パートはディアマンティが原曲から転写)
カヴァティーナの後のレチタティーヴォ	(ロッシーニが新たに作曲)

N.3 少女たちの合唱	《コリントの包圍》(1826年) N.8 ディヴェルティスマンの中のバラードと合唱 〈L'hymen lui donne〉 (原曲は《エルミオーネ》(1819年) N.2の合唱〈Dall' Oriente〉に遡るが、本作はディアマンティが《コリントの包圍》を原本に作成。イズメヌスの独唱は二人の女性合唱首唱歌手のユニゾンに変更)
合唱の後のレチタティーヴォ	(ロッシーニが新たに作曲)
N.4 合唱付きの四重唱	《アルミーダ》(1817年) N.3 四重唱の中の〈Sventurata! Or che mi resta〉 及び《リッチャルドとゾライデ》N.12の無伴奏四重唱〈Contro cento,e cento prodi〉 (ロッシーニは《アルミーダ》原曲の中間部に《リッチャルドとゾライデ》を接木し、原曲の男声合唱に女声を加えるなどして声楽パートを作成。管弦楽のパートはディアマンティが原曲から転写し、ロッシーニが金管楽器を変更して打楽器を追加するなど手を加えている)
四重唱の後のレチタティーヴォ	(ロッシーニが新たに作曲)
N.5 フィナーレ	《コリントの包圍》N.14 レシとセーヌ〈Quel nuage sanglant〉 (開始部を19小節に切り詰めてアレグロ・ブリランテに繋げ、フル編成のバンドを追加)

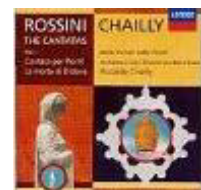
ロッシーニはスパルダに宛てた10月25日付の手紙で完成楽譜を代理人カミッロ・ピッツァルディ侯爵に渡したと報告し、「軍楽隊はオーケストラと反対側に配置されなければなりません。それがエコーの効果をもたらします」と述べている⁶。選ばれた原曲はナポリ時代のオペラ・セーリア《アルミーダ》(1817年)、《リッチャルドとゾライデ》(1818年)、さらに《マオメット2世》(1820年)のフランス語改作《コリントの包圍》(パリ、1826年)で、N.4 少女たちの合唱は《エルミオーネ》(1819年)が初出である。

聴き応えのあるのは万人の愛のカヴァティーナ(N.2)と合唱付き四重唱(N.4)で、《リッチャルドとゾライデ》第1幕アゴランテのカヴァティーナを転用したN.2はアマチュア歌手を前提に技巧を控え目にしながらも勇壮かつ力強いテノール用法が際立つ。極めつけはフィナーレに先立つN.4で、合唱付き四重唱としながらも実質的にソプラノを際立たせたナンバーで、華麗なアジリタが使われる。初演歌手ルイージャ・フィネッティ(Luigia Finetti,?)に関する情報は乏しいものの、ハイドンのオラトリオ《四季》のソリストを務めるなど、ローマでコンサート歌手として一定の経歴をもつ。《コリントの包圍》を原曲とするフィナーレ(N.5)は、ソリストとフル編成のバンドを伴う勇壮な行進曲の合唱で締め括られる。

初演は1847年1月1日、ローマのカンピドーリオの丘の元老院会堂で行なわれ、ドメニコ・アラリ(Domenico Alari, 1812-1879)指揮の大規模なオーケストラによる《ギョーム・テル》序曲、100人の合唱団による《教皇ピウス9世に感謝する歓喜の叫び》に続いて行われ、いずれも熱狂的成功を収めた。だが、ロッシーニはカンタータの楽譜の出版を許さず、結果的にたった一度の演奏で終わった。校訂譜はロッシーニ財団が1992年に成立させ、同年7月16日ローマのヴィッラ・ジュリアで復活演奏が行なわれている(指揮:リッカルド・シャイー、独唱:マリエッラ・デヴィーア、クリス・メリット、シモーネ・アライモ、フランチェスコ・ピッコリ)。



《教皇ピウス9世を讃えるカンタータ》初演の印刷台本



推薦ディスク リッカルド・シャイー指揮 独唱:マリエッラ・デヴィーアほか(1997年録音 Decca)

¹ 《湖の女》(1819)第1幕フィナーレの合唱を改作転用した合唱曲。詳しくは当HP掲載の拙稿「《教皇ピウス9世に感謝する歓喜の叫び》作品解説」を参照されたい

² 書簡全文は全集版 II-6: *Cantata in onore del Sommo Pontefice Pio Nono*, Fondazione Rossini, Pesaro, 1996., 序文 p. XXIII.. に再録。

³ Ibid., p. XXIV.

⁴ マルケッティは《タッソ生誕300周年のための合唱曲(*Coro per il terzo centenario della nascita del Tasso*) (1844年)の作詩でロッシーニと係わっていた。

⁵ 全集版 II-6: *Cantata in onore del Sommo Pontefice Pio Nono* 序文 pp. XXVIII-XXIX.

⁶ Ibid., pp. XXV-XXVI.